

佐賀新聞大正期炭坑記事（一）

町田，保次
佐賀行政監察局

<https://doi.org/10.15017/13604>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 5, pp.66-101, 1975-06-25. エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：

している。

なお『筑豊炭鉱誌』によると、明治三十年頃の許斐は、本洞炭坑・道手炭坑を経営し新手法炭坑は九州炭礦株式会社、藤棚は長谷川芳之助が坑主となつてゐる。

許斐鷹介の炭礦経営関係資料が加藤家に保存されているのは、当時の加藤家の当主加藤仁八郎が新手法炭礦組合に参加し、出資していた関係からと思われる。

佐賀新聞大正期炭坑記事(一)

町田 保次

大正三年五月六日

岩石にて圧死 東松浦郡厳木村大字浪瀬岸田安太郎(四五)は去る二日坑内採掘従事中、午後一時頃俄然坑口の岩石墜落し 全身圧迫されて即死をとげたりと。

大正三年五月六日

無届にて科料五円 杵島郡北方村杵島炭坑在住の渡辺寅之助(二七)は明治四十二年徴収補充兵役なるが岡山県岡山市桶屋町の原籍地を無断に飛び出し、神戸市や長崎県下の松浦炭坑等を徘徊し、去月十七日現在所に来り其のまま届けも出さざるにぞ昨日科料五円に処せられたり。

大正三年五月八日

無届で科料五円 杵島郡北方村杵島炭坑々夫桑野光蔵(二七)といふは陸軍補充兵なるが原籍地大分県日田郡中津口村合瀬を出発し熊本県白川電気会社及び当佐賀電気会社に雇はれ、其の後去月一日現在の

所に来り居れるも其の筋に届出でをなさざりしより昨日科料五円に処せらる。

大正三年五月九日

陸軍補充兵検査さる 杵島郡錦江村戸ケ里の立蔵万蔵(三〇)及び長崎県東彼杵郡佐世保村横尾の宮地亀市(二五)の兩人は何れも陸軍補充兵なるに無断にて杵島郡北方村杵島炭坑に出稼ぎして十四日以上経ても其の筋に届出でざりしかは昨日其筋に検査されたり。

大正三年五月十二日

坑夫の惨死 西松浦郡東山代村大字川内野実松炭坑々夫藤田光太郎(二七)は去る九日午前八時三十分頃より入坑し、採炭従事中盤石墜落し、無惨の即死を遂げたりと

大正三年五月十七日

坑夫の即死 東松浦郡北波多村大字岸山芳谷炭坑々夫大隈勝次(二二)は、去十四日午後三時二十分頃坑内新坑道右一片又六〇号切歯に於て採炭事業に従事中、天井の硬石墜落し、即死を遂ぐ。

(一〇一頁へ続く)

男一五〇斤、女二二〇斤。

「テボ」男一二〇斤以上、女九〇斤以上のこと。

(イ) 臂力 「エブ」に鉄板を入れて検査する。通常六〇斤以上なること。

(ロ) 精神力 削切法によって注意力を試験する。
以上のうち肩力と臂力は保護坑夫の深夜業と入坑を禁止されてから
は検査をしないことになっている。(未完)

(六六頁より続く)

大正三年五月十九日

補充兵の科料 小城郡東多久村多久鋳業株式会社鋳夫吉瀬保太郎

(三二) は補充兵陸軍輜重輸卒なるが去る二月以来無届にて本籍地を離れ現任所に来住す。依りて科料五円に処せらる。

大正三年五月二十九日

中旬の鉄道運炭 本年中旬間における九管各線の運炭高は二九八、

四一二トンにして之を上旬に比するも四〇〇〇余トンを減じ客月中旬の三〇万トンに比すれば二〇〇〇余トンの減少なり。尚着駅別として対比する時は左の如し。

大正三年五月二十日

女の投身 西松浦郡大川内村大字吉田村生れ、東松浦郡北波多村芳

谷炭坑々夫原ムメ(一九)は五、六日前より精神に異常を呈し、去る十四日午後四時頃無断家出し行衛不明となりしが十七日午前十二時頃長溜と称する池中に投身し、溺死を遂げたりと。

四月下旬

五月下旬

大正三年五月二十二日
炭坑人夫の変死 杵島郡北方村志久杵島炭坑人夫中島五伊右衛門(三八)は去る十八日午前七時半頃就寝中本坑組立工場入口にありし長一二尺重量二一〇斤位の鉄棒を一人にて運搬中過て跪き鉄棒に任せられ、同所に敷設せしレールの角にて左前頭部に切創を負ひ出血甚しきより人事不省となりしを以て直に同坑病院に運び施術中午後零時半頃死亡せり。

若松	一五三、二八五	一四八、一五〇
門司	二六、八二五	二五、一一五
小倉	三、〇一四	三、〇七〇
戸畑	六七、一三六	七〇、五一七
八幡	一八、八七九	一九、八二八
宇の島	三、二一四	二、五四七
長崎	六、一一〇	四、五八二
西唐津	二一、六二四	二四、六〇三
唐津	一三三	
計	三〇〇、〇九七	二九八、四一二

大正三年五月二十八日

相知炭坑の布教 東松浦郡相知炭坑にては 去二十五日午後二時より相知宿にて坑夫及び一般信者に向って神代智明氏は「国民の大自覚」

大正三年六月一日

浮浪者あげらる 市内唐人町中島久治(二三)は一昨日午後三時頃浮浪罪として検査されしが説諭の上同日放還さる。